

巻 頭 言

精神文化学会 会長
近藤 剛

民主主義の凋落と権威主義の拡大に直面する最中で、改めて国家観が問われている。国家とは祖先との歴史的連続性において、その民族に固有の伝統と慣習を継承することによって成立し発展していく「国民精神」の共同体であると考えられる。しかしながら昨今では、歴史に対する愛着は非常に乏しく、規範からの解放が急速に推し進められ、いわゆる国柄の溶解は止まらない。歴史的に蓄積されてきた文化や道徳を軽蔑し、共同体の秩序や紐帯を解体あるいは破壊するイデオロギーが喧伝されている。

例えば「らしさ」を押しつける「ジェンダー規範」は排除されるべきだと主張が声高に叫ばれているが、「男らしさ」や「女らしさ」を拒絶するところに「多様性の尊重」はあり得るのか。そもそも、規範を解体してしまったら、価値基準も雲散霧消してしまうのではないのか。反歴史的なトレンドが反道徳的な社会を出現させ、人間集団の共産化・機械化を加速させることを恐れる（残念ながら、確実にその方向へ向かっているが）。

そこで呼び戻されるべきは保守思想である。保守思想の要諦は伝統を遵守することである。伝統とは何か。賢人に倣えば、それは真つ当な人間の「生き方」（小林秀雄）、「暮らし方」（田中美知太郎）、「精神の型」（福田恆存）、「精神の形」（三島由紀夫）、すなわち範型である。伝統を批判的に継承し、今日的に解釈する知の作法が求められており、それを欠いては健全な自由民主主義は養われないものと思われる。そして、そのような作法は精神文化学の手法に拠るのであり、現下の不安定な時代状況において、ますます本会の設立の趣旨が問われている。

本会の活動は大規模なものではないが、少数であっても良質的なものでありたいと願っている。精神文化の弱体化は人間性の劣化に直結している。精神文化の昂揚に向けて、会員各位には一層のご協力を賜りたい。